

謹 祀

次の会員がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

佐 藤 信 一 氏 徳 山医師会 11月7日 享 年 64

編集後記

本会報7月号「今月の視点」で取り上げた大阪・関西万博が、10月13日に閉幕しました。誌面で紹介した以上、責任を持って現地を訪れましたので、参加報告をさせていただきます。

大阪・関西万博は、大阪市此花区の人工島・夢洲にて、2025年4月13日から10月13日までの184日間開催されました。「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、158の国と地域、9つの国際機関が参加した国際博覧会でした。

開幕当初はユスリカの大量発生やレジオネラ菌検出などネガティブな報道もあり、全国的な盛り上がりには今ひとつ欠けていた印象でした。私自身も遠い存在を感じていましたが、子どもとの夏休みをどう過ごすか考える中で「今年しかない」と思い立ち、8月に訪れるにしました。

チケット購入やパビリオン予約には手間と時間がかかり、抽選にも外れ続けましたが、まずは一人で2時間という短時間ですが下見へ行くことにしました。西ゲートに到着すると、国旗がはためくポールの下を歩きながら、胸が高鳴るのを感じました。ミャクミャク像と大屋根リングが迎えてくれた瞬間、万博の世界に引き込まれたのを覚えています。

その後、子どもとの本番訪問、敬老の日には両親を連れて再訪しました。パビリオン予約は叶わないことも多く、炎天下の待ち時間に熱中症寸前になったこともありましたが、それでも行けば行くほど魅力が増す不思議な空間と貴重な時間でした。

パソナ館では拍動するiPS細胞由来の心臓模型（心臓の拍動は心房細動でした）や、未来医療の映像展示に触れ、技術の進展に驚かされました。両親とは55年前の大阪万博の思い出を重ねながら、大屋根リングに上ることができ、少し親孝行もできた気がします。

万博は、事前準備や当日の混雑、酷暑など、決して容易な体験ではありませんでしたが、それらを上回る感動と学びがありました。閉幕を迎えた今、夢洲の風景とともに、かけがえのない記憶として心に刻まれています。

（理事 國近 尚美）